

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 先 第 337 号	氏 名	松重 摩耶
審査委員	主査 山中 英生 副査 鎌田 磨人 副査 上月 康則		
学位論文題目 学習者の学び方に着目した干潟・運河での環境教育に関する研究			
審査結果の要旨 環境教育や自然体験の実践者は教育理論や手法に関する知識が実践的な中で、ESDや学習者への『新しい能力』の修得も期待されており、近年の社会環境や学習者の感性の変化にも対応しなければならぬ。また干潟や運河のように単発的なイベントで行う環境教育や自然体験において『学習者の学び方』に着目して質的転換を試みた研究はまだ緒についたばかりで教育の実効性を上げることは容易ではない。本研究では干潟や運河をフィールドとした場合の環境教育や自然体験中の『学習者の学び方』に着目し実践的理論の検証を行いながら、その実効性を高める方向性を明らかにすることを目的に行った。 主な成果は以下の通りである。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 第1章において、環境教育や自然体験が抱える実践的理論と課題を提示した。 ➤ 第2章において、干潟や運河をフィールドとして環境教育や自然体験を行う意義について考察した。さらに、環境教育や自然体験に関する系譜をまとめたことで目的や内容のことなる教育形態が環境教育という言葉で同一視されていることを提示した。 ➤ 第3章において、大学生への自然体験教育では、ただ体験させるだけでは学生の素質によっては学びが深まらないことがわかった。その対応として『協同学習』のような個人の責任が明確化され、互惠関係が促進される構造化された原理を組み込むことで、多様な学生の素質に合わせた学びを深めることを提案した。 ➤ 第4章において、小学生への環境教育では、知的好奇心や学習意欲を高める理論や発問をプログラムに組み込み、児童が知識の統合や比較等を促しやすいようにALの視点から学習プログラムの質的転換を図った。その過程をアクションリサーチした結果、AL型の学習をした児童は、学んだコンテンツをつながりとして理解している割合が多かった。 ➤ 第5章において、実践的理論について考察を行い、『学習者の学び方』に着目して環境教育や自然体験の実効性を高める方向性を示した概念図を提案することができた。しかし、『学習目標（レベル）』『学習時間』『年齢』や生涯学習に関する適用範囲については今後の課題である。 ➤ なお、本論文の審査には、山中亮一講師の協力を得た。 			